

## プチ不良？

「落合、大学不合格だと言われたが、どうする？」と通っていた高校の進路指導の先生からの言葉でした。

私は、小学校から野球に明け暮れ高校生になっても、勉強1・野球9と言う生活を送り、おへそが出るような学生服に、社会の教科書に出てくる南蛮人が履いていたような、当時で言うボンタンズボンを履いていました。お世辞にも優等生とは言えない学生でした。

できたら、大学に進学してまた4年間野球ができればと思っていました。その間できつとやりたい仕事が見つかるだろう・・・その程度にしか考えておりませんでした。ですので、不合格を聞き、何をどうしたら良いか・・・でした。そんな時、進路指導の先生から、「もうこの時期だから専門学校しかないぞ」と、紹介されたのが福祉の専門学校でした。私自身、浪人なんてできないし、手に職がつくから、いいか程度で受けてみたのがこの仕事に関わるきっかけでした。

## 初心を忘れずに

専門学校に入学し、初めての研修は特別養護老人ホームへの1週間の研修でした。このころには、高齢者の仕事に対し魅力を感じてきたところでしたので、今まで勉強した事や自分が思い描いていた事等が、どの位生かせるのかすごく期待をしておりました。

緊張でガチガチになっていた私をほぐしてくれたのは、利用者様の言葉でした。「お兄さん。ちよつとお願い。」「ありがとう。」「何気ない一言ではありましたが、とてもうれしく、私にとつたら、補欠の自分をスターティングメンバーで起用してもらえたような思いでした。たぶんこの「ありがとう」と言う言葉が忘れられず、この仕事を続けているのではないかなあと思っております。

実際の現場デビューは衝撃的なものでした。

一人で何人もの食事介助をこなし

時間で一斉におむつ交換を行い

お風呂待ちの長蛇の列に、短時間入浴

自分が思い描いていたものとは大きくかけ離れており、絶句でした。疑問だらけでしたが、しかし、研修生の身、生意気なことは言えるわけもないし、もしかしたら特別養護老人ホームはこういうものなのかもしれない。何といても、始めて見る現場だからと自分に言い聞かせ取り組んでいたことを思い出します。

研修も終わりに近づき、寮母さん寮父さんの話を聞き、やはり理想と現実の違い、机上の空論では現場では働けないのだと肩を落としていました。そんな時、研修担当の指導員さんに、「この施設がすべてではありません、絶対に初心を忘れないでください。」と話して頂きました。この言葉に、とても救われ、勇気をいただきました。そして、この研修を通し、もつときめ細かく利用者様と関わりたい、いつも利用者様本位の理想に近い施設を、「いつか自分の手で作りたい。」これが私の一番最初に抱いた企業の瞬間でした。

## 最後のひと押し

専門学校を卒業後、1年〜3年という間隔で特別養護老人ホーム、訪問介護、訪問入浴、デイサービスを転々としました。今となったら恥ずかしいのですが、そのころの自分は皆とは違う、もつと自分が活躍できる場所があるはずと、少し斜めに構えていたところがあつたような気がします。若気の至りですが・・・

その間開設をしたい気持ちだが、浮き沈みしていました。そして、最後に勤務した会社が無ければ、今ここに立つことが出来なかったと思うと、複雑な思いがしております。

「施設長さんいる?」

「何でこんなになつているのに・・・」

と1本の電話がありました。電話の主は、当時私が管理者をしていたデイサービスの利用者様のご家族からでした。この時、この利用者は骨折されていました。そ

の日のトイレ介助の際、職員が鈍い音に気付いていたのですが、報告を怠っていた事が事後報告で分かりました。

とにかく、こちらのミスだった為、何も役に立たない事を承知で通院介助やお見舞いをしました。この間、何度か上司と連絡を取っていたのですが、会社としてはつきりとした方向性も指示もなく、ご家族はご立腹、事故を起こした職員は退職と打つ手がないまま時間が過ぎて行ったことがありました。

大きな組織では、このような時でも指示を仰がなければならぬ反面、何か生じた時だけ責任を取らなくてはならない曖昧な権限を持たされます。これでは、せっかく志の高いスタッフが集まっても、気持ち良く働ける環境を提供できないと同時に、それが事故やサービスの質の低下につながるのではと感じました。

この時、「自分は皆とは違う、自分の活躍できる場所が他にある・・・」  
と言う気持ちから、「自分で何とかしなくてはならない」と変わった瞬間でした。  
これが、最終的な開設へのひと押しでした。

## 開設準備

現在の職場では、これ以上職員を守ることができないという事と、独立という夢の実現への思いが高まり、退職することにしました。

その瞬間は、本当に躊躇することなく、自然に辞表を提出していました。

こうして、私のサラリーマン生活が終わりました。

「さあ、始めるぞー！」と意気込んでみたものの何から手をつけて・・・というスタートでした。今、考えると、結婚をして間もなく会社を辞め、当ても無く独立しようとしていたのですから、かなり無謀なことをしてきたと、自分ながらに呆れています。しかし、何だかわからなかったのですが、その当時の自分には少しも失敗するような気がしなかったのです。

そんなこんなで、2ヶ月近く引きこもり生活をした後、妻の父親から上田市の土地を使っても良いという話を頂き、動き始めました。

そこは、閑静な住宅街で土地は100坪、築数十年の家が建ててありました。まず、改修をして使えないものか、業者を当たり始めました。そこで、「いくら位かけられる？」と業者の方に言われ「なるべく安く」と答えその場を切り抜けました。実際この時は、相場がわからず、何にいくらかかるかわからない状態でした。そんな状態でしたので、まず企画書作りからかかりました。

自分の思い・事業の内容・周辺地域のリサーチ・収支予算書・利益計画書等かなり時間がかかるのかと思っておりましたが、やり始めるとかなりサクサクと進み今考えると、一番楽しい時間だったように思えます。

実を言うと、会社を辞める前から、ある社長さんに一緒に組みましようと言いかけられ何度か企画書や、経営等教えて頂いていたおかげだったのです。私のミスと一緒に組むことができず、すごく迷惑をかけてしまったのですが、今でもこの社長さんは色々指導して頂き、私の師一人です。

## 引き抜き

私自身、上田市では仕事をしたことも無く、この地域の状況も知りませんでした。そこで、以前勤めていた会社に親しいケアマネジャーさんが居ましたので、その方と一緒に事業所を作ろうと妻に相談し、その方を口説くことにしました。ただ、何も無いところに連れて来るので、かなり難航すると思っていました。

ところが、食事をしながら、計画を話してみると、あっさりOKの言葉を貰うことができました。それどころか、今現状で宅老所を探している方を何人か連れて行けるという好条件の返事でした。実際、何度か話さなければ口説けないと思っていたので、こんなに上手くいっているのかと少し浮かれておりました。それに、開所から数人でも利用者様が居ればサービス次第では、評判で利用者様も集まると思ったからです。

次に、責任者と実務者も前の会社の同僚を誘う事にし、実行に移りました。核になる方を口説いたので、「絶対に皆口説ける」と、このころは少し自信過剰になっ

ていたように思えました。しかし、相手の立場になると、大きな組織から、何の実績もないところに移るにはかなり不安だと思い、慎重に熱く自分の思いを伝えました。そして数日後、「一緒にやります。」との返事を貰うことができたのです。

## 落とし穴

ケアマネジャーの方が、退職してすぐに働ける時期を開所日にする為、2003年2月1日を開所日にし決め、再度建築業者さんに行き見積もりを取り始めました。その業者さんに「改築より新築のほうが今は安いし、工期も短いこともありますよ。」と言われ、改築から新築の方向へ変わっていききました。また、融資の方も合わせて紹介します。と言うことだったので、全権をその業者に委ねました。企画書を元に、予算を決め、業者さんに頼み何度と無く打ち合わせをして、最終段階に入りました。

ところが、業者さんから、「やはりこの予算内では無理です。金融機関も・・・」の一言でした。普段あまり怒る事が無い私が、このときばかりは、すごく発狂しました。

かなり、時間をかけて来たところだった為、開所の時期に間に合わせる最低の時期でした。

と言つても業者さんを一軒しか当たってなかった自分のミスだったので・・・  
気持ち切り替え、安い業者を探しました。とにかく、工期が短く、安い業者を回りました。そして、一軒の業者を見つけお願いすることになりました。そこでも、融資の方を紹介してくれるとの事でした。しかし、前回失敗しているので、自分でも何とかしなくてはならないと、別ルートで金融機関を調べました。

そして、辿り着いた先は、国民生活金融公庫でした。

国民生活金融公庫は、とても金利が安いのが魅力でした。しかし、抵当を入れることが大前提でした。

父に土地を使って良いと了解を得ましたが、抵当までは聞いておらず、無理を承

知でお願いしました。

この時私は初めて事の重要性に気付き、身が引き締まると言うか、少し怖いという思いになりました。いろいろな人を巻き込んでいましたし、失敗は許されない。もう引き返せない状況に立っていたからです。

父の返事は、OKでした。

## 会社設立

建設業者を選んでいた同じ時期に、法人を設立することにしました。

迷うことなく有限会社を選択しました。

妻と私の中には、最初から営利法人しか選択肢にはありませんでした。

今までの高齢者福祉のイメージと言うと、ボランティア的なイメージが先行され、そこに働く人達(職員)もそのようなボランティア的な意識の方が多く勤務されておりました。このため、経営者側のビジネス的な見解と、ボランティア的意識の職員とが方針が合わず、実務的な部分で衝突してきた事が多々あったからです。

このボランティアからビジネスへ気持ちを切り替え介護のプロフェッショナルとして、良質のサービスを提供し料金を頂く、ビジネスであり営利を迫及しなくては、サービスの質は保てない、この気持ちを持ち続けて欲しいし、持ち続けたい。と思っています。だからです。

会社名も介護介護していないものにと、妻と二人で考えました。

いくつかの候補の中から「アットイーズ」しました。

「アットイーズ」は英語の at ease(きらくな、くつろいだ、癒し)から命名しました。宅老所に来る利用者だけでなく、ご家族、職員、ボランティア、地域の方々皆がきらくに、くつろいで頂けるような家になりたいと思い決めました。また、事業所はひらがなにし、土地の名前を付ける事にしました。これは、一軒だけでなく、これからも何件か事業所を増やしたい思いもあって付けました。

## 融資の面談

土地を抵当に入れることが決まり、建築業者の紹介の信用金庫と、国民生活金融公庫の両金融機関に企画書を持参し面談に入りました。

実際のところ私は、抵当を入れさえすればお金を借りることは決まったと思っておりました。しかし、両金融機関の担当者から次の同様のことを言われました。

「今のご時世は、どんなに不動産を持っていても、お金を貸せる事はしません。一番大事なのは、あなたの行なおうとする事業の、事業性です。」

初めての金融機関とのやり取りは、燦々たるものでした。企画書も駄目だしされ、詰めの甘いところをとにかく指摘されました。私にとってとても勉強になりましたが、改めて自分の不甲斐なさに落胆しました。

しかし、二度三度、面談を繰り返すころには自分にも自信をもて、企画書だけでは伝えられない思いを熱く語りました。生まれ持った口の上手さと、内心とても穏やかではなかったのですが、外見ではけして見えないふてぶてしい態度が、この時功を奏したのではと思います。

数週間後、両金融機関より概ねOKの結果を聞き、期間も短かった為、かなり危険でしたが着工を決めました。

## ドタキャン

着工を数週間前に控え、近隣のお宅に挨拶回りをすることにしました。これも少し構えていたことを思い出します。

「反对者が出たらどうしよう・・・」

こればかりが、頭をよぎっておりませんでした。しかし、一軒一軒回るにつれてその不安が安心に変わって行きました。

「石村さんのお孫さんか！他所者じゃないから安心したよ。」

皆さん口々にこのように言ってくれました。以前、住んでいた祖父母のおかげで近隣の方の了承を頂くことができました。

しかし、ほっとしている間もなく一通のメールが私の携帯電話に送られてきました。

「すみません。主人と話し合った結果一緒に仕事ができなくなりました。」  
一緒に開設をしようと誘ったケアマネージャーさんでした。直ぐには理解できず、何の事だかわかりませんでした。本当に青天の霹靂でした。想定していない出来事だっただけにかなりショックでした。

このころには、既に建物の基礎工事が終わり棟上をする時期になっていたので、計画を変更することもできなかったのです。しかし、これもコミュニケーションが足りなかった自分の責任、ここまで多くの人を巻き込んできた以上後戻りはできない、「何があってもやってやる。」と妻と二人で再認識しました。

しかし、このときには、ケアマネージャーさんが居なくなってしまった事で、後に大変苦労することになるとは想像もしていませんでした。

## 行政訪問

初めて上田市役所に行ったのは、計画がほぼ決まってからの事でした。他の市町村役場には営業に行った経験があったので、行政の方との面談は少し自信がありました。「常磐城6丁目に宅老所を開こうと計画しているのですが。」と、担当の係長さんにお会いしました。しかし、「私も変わったばかりで、わからないんだよ。」  
「市としては特別指導することや、制限はないので。」とのことでした。「あと、4月にお宅の近くに宅老所を開くNPO法人がありますよ。」と教えていただきました。（行政の打ち合わせも、もう少し事前にコミュニケーションを取るべきだったと反省しました。）

## 営業活動

ケアマネージャーさんが居なくなってしまったために、上田市でのコネクションがなくなり、一人で営業に出ることにしました。



上田市の全居宅支援事業所を回る計画を立て、回りだしました。

「上田市では初めての宅老所で、お泊りサービスもします。」と説明をしていくと、「宅老所って聞いたことがあるけど、介護保険の適用なの?」とか、「そんな小さなデイサービスでやっていけるの?」等と言われることもありました。また、誰一人知らない状態でしたし、相手も初めてだった為に、名刺を後ろ手に渡された事業所もありました。しかし、何度か通って行けば馴染みになる事業所はあるはずと、自分に言い聞かせ事業所を回りました。ところが、何度となく事業所を回ったのですが、開所目前になっても問い合わせの連絡が一向に来ませんでした。そこで、自分で作成した広告を数千枚作成し、新聞の折り込みチラシに入れてもらうことにしました。折り込みチラシの効果もさほどなく、ケアマネジャーさんではなく、チラシを見られた介護をされているご家族から2, 3件の問い合わせがあった程度でした。厳しいことは想定していましたが、ここまでとは思っておらず、失ったケアマネジャーさんの存在をこのときに嘆いておりました。

### あつといーず上田開所

普通であると、待ちに待ったとてもうれしく感激のオープニングの日だと思います。しかし、あつといーず上田にとっては記念にはなつたのですが、最悪な開所でした。2003年2月1日、開所日だというのに職員しかおらず、利用者は誰も居なかつたからです。

この時、職員も、ケアも他の施設には負けない自信があるのに、お客さんが居なければそれも実証できない。とにかく、少しの時間でもいいから、あつといーずに来て欲しいそんな気持ちでした。

営業をしていた頃から厳しい事は気づいていましたが、結局開所してもなお問い合わせがなかつたのです。結局、開所した2月は3人の利用者しかいらっしやらなかつたのです。この月の国保連に請求した単位数は、7千数百単位でした。

本当に遅いのですが、この数字を見たときに自分の甘さに腹が立ちました。思い

だけで進めてきた、しつぺ返しでした。引き抜いた職員等に、奇麗事を並べ実際には利用者さんが居ない現状……。ビジネスなんだと言いながら、思いが先行している自分自身を見つめ返しながら、職員にはけして悟られないよう営業に駆けずり回りました。

## お泊り第一号

このままでは運転資金も底を付いてしまう、このままでは会社が潰れてしまう、と本気で青ざめていた3月の中旬、これからのあつといーず上田を経営的にも、ケアにも左右する利用者のご家族から入所希望のお話がありました。

話がまとまり、長野には珍しい4月に入つての大雪の日に、ご家族の車に乗って県外より200km離れた当宅老所に一人のおじいちゃんが到着しました。

「いらっしやい。遠いところ疲れたでしょう、さあお上がりください。」と職員が声をかけると「・・・寒いから出ない。」と返答が返ってきました。

このおじいちゃんとの出会いは、妻が以前施設長として勤務していたグループホームにこの方が(ご家族)入所を希望されていたことからでした。職員とともに、入院先の病院に入所のための面談にお伺いしたとき、妻は「絶対この方と関われない!」とその当時話しておりました。身長175cm、体重?ベットに縛られ、「離せ、殺す気か!」と怒鳴つておりとにかく大きくて怖いイメージしかなかったからだと思います。このおじいちゃんは、大病をすることなく80歳過ぎまで自宅で過ごされておりましたが、自宅で転倒され、入院さきの病院で検査の結果、肺がんの末期と診断されて余命1〜3ヶ月と宣告されたそうです。

認知症も有り、大声で叫ぶことも有り、病院側としたら一日でも早く出て行って欲しいと面会の度にご家族に催促したそうです。病氣と認知症があり受け入れ先がなく、妻のグループホームに来るようになりましたが、病氣のせいか退院当所から40℃近い高熱が続き、オムツを替える前にオムツを外し放尿、大きな声で怒鳴る・・・グループホームのスタッフもさすがに音を上げてしまい、妻から相談さ

れました。そんなに困っているのならと、あまり深く考えずに引き受けることとなったのです。(色々ありグループホームには内緒で、自宅で見ることになったと言つて退所されました。)

象の様に浮腫んでパンパンの足、高熱続き、放尿・・・引き受けたのは良かったのですが内心はとても穏やかではありませんでした。

そして、悪夢のながい初夜がはじまりました・・・長旅のせいか夕食も食べずに16時に入床され、そこから排尿の訴えが30分毎に続きそのつど怒られながらポータブルトイレ介助や衣類、おむつ交換を20数回行いました。

翌朝、私たちとは正反対で、晴れ晴れとした笑顔で目覚められ朝食を完食されました。そんな、夜が何日か続きおじいちゃんの余命を待たずに私か、スタッフが、先に倒れるのではと少々へこんでいました。(当時夜勤のできる職員が3、4名しか居らず、私も4日連続夜勤もしていたので)そんな毎日を繰り返しているうちに、何がよかったのかわからなかったのですが、浮腫みが引き体温が、36℃台に落ち着いてきたのです。残された課題は、夜間の排尿と、食欲の不振でした。食欲は、一時おやつのお菓子程度しか食べることがなくなってしまう、どうしたものかと頭を悩ましておりました。

開所間も無く、利用者も少ない状況だった為、あまりにも手を出しすぎではないか？本人の訴えた事をただ聞き過ぎていないか？個人の尊厳？わがまま？手を出しすぎたために、依存心と命令口調のように険しい口調になったのでは？

放尿しようが、失禁しようが、ご本人が気持ちが悪ければ何かこちらに訴えてくるものがあるはず！寝ていたい、どこも行きたくない、ベット上での飲食・・・本人の訴えどおりのケアだけでは駄目と、ここからあつといーずの「ほったらかしケア」「訴え鵜呑み禁止ケア」が始まったのです。

食欲不振がある日を境に嘘のように食べてもらえるようになったのです。それは、少し離れた市外の某所、杏のお花見を職員が計画していた日のことでした。ご本人はかなり外出を拒んでいたのですが、到着すると久しぶりの外の空気と杏の花

の相乗効果か？車を降りた時からとてもよい表情で、お重を広げるや否やおにぎりをほうばりました。帰りには職員と半部づつ食べるはずであったソフトクリームも、一つぺろつとたいらげてしまいました。この日以降、食欲だけでなく、元気になり徘徊までするようになりました。今までであったら、行きたくない人を連れて行くことはなかったと思っております。その結果どうなっていたらどうか？良かったのか？悪かったのか？

残された排尿はというと、ほつたらかしケアのおかげで尿失禁の連続で衣類、シーツ交換が夜間に数回ありました……。ところがある日の晩ゴミ箱に排尿することがあったのです。これだ、やつとここまで来た！ただの放尿でなく、意味のある放尿でした。この日を期に徐々にオムツからリハビリパンツに変わり、そしてご家族が持参されたMY尿器がベツト付近に置かれることになりました。この時から、ごく稀に失禁がある程度でほとんど尿器で排尿をされるようになりました。これも今までだったら……。良かったのか？悪かったのか？。

宅老所のような小規模で、人手がそこそこあり、深く関われることの弊害に苦しんでいる毎日です。良いケアとは、悪いケアとは、その時、場所、人により、良くも悪くもなるもの。判断は十人十色ですがそれを理由づけし、よしにするか、だめにするかがその施設のカラーになるのではと思っております。改めて、小規模ケアは個々にしつかりとした理念がなくては、「理念ありき」でなくてはならないと実感しました。

このおじいさんのおかげで色々な事を学ぶことができました。そして、あつといーずのケアの基礎ができた様な気がしています。この頃から、利用者さんの申し込みが相次ぎ、やつと思いついていたような姿になってきました。

## あつといーず更埴

更埴という地名は、今は合併して存在しない4万人弱の市で、私が以前在宅の訪問入浴や、デイサービスに勤務していた時に私を育てて頂いたとても思い入れが

ある土地です。この地でいつか恩返しの意味も込めて、仕事をしたいと思っております。そんな時に、合併の話があり更埴という名前がなくなってしまうことを聞き、少しでも更埴市の名前があるうちにとの思いで、急いで開所させることになりました。助成金を頂くと役所に挨拶や打ち合わせ等かなり時間がかかってしまうので、助成金はあてにしないことにして物件探し、金策に走り回りました(長野県には県単独事業で、小規模施設を開設する法人に助成金を支給する制度があります)。2度目ということもあり物件も金策も驚くほどスムーズに行き意気揚々としていたのですが、1件目同様またも責任者のドタキャン・・・何もかもが振り出しに戻ってしまいました。しかし、これも考えてみれば前回も同様のことだっただけに、切り替えが早く、おかげで良いスタッフと出会うことができました。また、行政の話し合いも密にでき、更埴市との話し合いの中で「宅老所」という字は、土地柄抵抗があることを係長さんから聞き、1件目は宅老所あつと一貫と「宅老所」という字をつけたのですが、今回あえてつけませんでした。急な計画だった為とても準備万端とは言えませんでした。いろいろな方に支えられ2003年7月23日に、何とか開所することができました。

上田市とは違い、更埴市の全ての居宅支援事業所のケアマネジャーさんも知っていたので、とても心強く、そのせいか、利用者さんも開所前より数人紹介され、開所日から利用者が0人と言う日はありませんでした。

## あつと一貫ずホーム

2005年2月で3年目に入ったあつと一貫ずは、季節により波はありますが(長野県の冬季は越冬短期入所があるので。)何とか軌道に乗りつつある状態でした。しかし、現状のお泊りのサービスのニーズが増え、既存の事業所では対応が難しい状況になり、入居の施設を望まれる利用者様、ご家族様の声に、2005年5月にグループホームを開設する事になりました。

以前住んでいました千曲市磯部地区に何か貢献できるものをお願い、市の係長さんと話し合ってきた結果、市の整備計画とうまく合ったこともあり計画が進んでいきました。

このグループホーム開設も、色々な問題があり、とても勉強になりました。実績として2件を運営させていただいていましたので、さまざまな面で自信もありましたし、うまくいくことしか想像はしておりませんでした。

会社が3年目に突入する目前の時期でしたので、決算書、試算表を見て金融機関もこちらからお願いせずにも是非うちにと、借り入れのお話を頂けました。建設業者も大手の企業にお願いすることができました。ここまでは、何の不安もない状態でしたが、地域特性を熟知しておらず初めからとても苦労しました。

着工に当たる前に行政の担当者の方より、グループホームは地域の方々の関係が不可欠になるので、念書はいろいろなが、きちんと説明をして納得していただいて下さい。と指導がありました。それは、当然ですし、私も住んでいるので地域貢献にもなるのだから、快く受け入れて頂けるであろうと心配もしておりませんでした。

早速当時の区長さんに、事情を説明し、年度末に開かれる総会で挨拶をさせていただきたいと申し入れました。ところが、一般企業の宣伝にもなりかねない事例なので、三役で話し合った結果、「それはできません。」では、回覧板に挨拶文を・・・「それもだめです。」という結果に愕然としました。

結果的には、200数世帯全戸に挨拶文と、各分区(地区の班)の新年会に挨拶をさせて頂きたいという書類を作成しポスティングをしました。

新年会は7回すべての会にチラシを持ちグループホーム、認知症の説明をしました。説明の際は、「鍵や門を付けないのか・・・」「認知症の人がこんな近くに来て・・・」等という意見も出しましたが、グループホームケアを説明させていただき、何とかその場を収めさせていただきました。

また、今回のグループホームは、今まで宅老所の規模の倍以上で、職員の人数もそれに比例していました。新規のオープンなら人は集まるはずと思っていました。が、これも地域の特性なのか、なかなか集まらず苦勞しました。

バタバタの中での、平成17年5月1日のオープンでしたが、利用者様は、定員18名以上の予約をいただき順調にスタートを切ることができました。

現在は、主治医の先生や訪問看護ステーション、のご指導もいただき、ターミナルケアもさせていただいております。

### これからのあつとーず

ここまでお話しすると、とても順調に感じられますが、内情はかなり厳しく、優雅に泳ぐ白鳥のように、水面下ではドタバタとしている現在のあつとーずです。

本当にあつという間に過ぎてしまい、ただただ肩肘を張ってきたように思えます。そのおかげで、得たものもたくさんありましたが、失くした物、見落としてきたものもたくさんあったかと思えます。現在まで、あつとーずを利用して頂いた利用者様、そのご家族、ボランティアさん、地域の方、他事業者さん、行政の方々、スタッフ、様々な方のおかげでここに居られる。その感謝の気持ちを忘れず、再度初心に戻りたいと思っております。

その方々の為にも、また、まだ出会えていない多くの方にも、あつとーずを介して知り合い、喜んで頂けるよう、サービスも会社も成長させていきたいと思えます。私自身の使命は、この世に命がある限りどれだけ多くの方と出会い、喜んで頂けるかだと思っております。そのためには、自分がどのような状況になっても、リスクを恐れず優雅に泳ぐ白鳥でありたいと思えます。

これは、今は亡き両親が最後に残してくれた、生きて行く為の術でもあるので…

長文にもかかわらず、最後まで読んでいただきありがとうございました。